

「京大教養部報」No. 55 1973年9月25日。

ことばの問題 — 言語の「構造」

周知のように世の中には単数と複数を区別する言語がきわめて多い。このような言語では数の範疇は通常現実の客観的な反映であるとみなされている。だが果たしてそうであろうか。例えばここに一個の対象があるとする。これは原則として単数によって示される。これに一個を加える。これは複数によってあらわされねばならぬ。また一個を加えてみる。複数である。さらに一個を加える。依然として複数にとどまる。これはやがて無限へと連なるであろう。

ここで一個の対象と二個の対象とは言語的に質の異なるものとして、異なった形式によってあらわされ、二個の対象と五個の対象とは同質のものとして表現されている。しかし現実には一個と二個の懸隔が二個と五個のそれよりも甚だしいということはない。これは言語の虚構にちがいない。

一方無限をもその裡に含みうる複数を個物の表現と対置することは、必ずしも我々の日常感覚に副うものではない。これは対偶をなすことによって安定するものが身近に多いこととも関連しているであろう。「二」が余りに分明すぎるのである。このためでもあろうか、二個の対象をあらわす特別な形式を具有する言語も少なくはない。ラウジツツ語、スロヴエン語などがそうである。印欧語も古くには一般にそうであった。双数である。ここでは無限へのはじまりを示すものは二個ではなく、三個の対象であった。双数は絶対的な「個」と「無限」との媒介者として立ったのである。このような「三」の性格が我々が世界を把握する仕方により近いものであることは、日常いたるところにその例をみることができる。ホワットモウが述べているように、Tierra del Fuegoの土着民が三までしか数を数えられなかったとしても、それだけで彼らが三個の事物しか考えなかったということにはなるまい。事実は三迄の数によって彼らは有限より無限をのぞんでいたのだと考えるべきであろう。慣習法において三人が群衆と考えられていたのも、この性質よってのことに違いない。

かくして三は無限に連なる。人についてはそれは群衆であり、社会であり、世間一般である。ラテン語で証人を意味する *testis* は **ter-stis* (3 + 立つ) であった。それは第三者であり、その承認は世間の承認でもあった。ギリシア悲劇において、人生のあらゆるドラマをあらわすのに三人の俳優をもってすれば足りるといわれるのも、またこの故であったろう*。

また *testis* が証言するという行為は、彼が見たものを「言う」ことに外ならない。この行為によって個別的体験は世間一般の共有物に転化し、個人の手をはなれる。このことを通じて世間一般における第三者の地位はゆるぎないものとなる。更にこの行為はまたある個人の体験を他のものの上に喚起することでもある。かくして「言われた」こと、話されたコトバは、魔術的な力を獲得する。言霊である。コトバはかくして神となる。あるいはこれを司るものはや神以外にはない。ある事物の名を口にすること、それはその物を第三者の体験に委ねることである。世間一般たる第三者の手に委ねられた事物に対して、もはや個人の力は及び難い。かくしてさまざまなタブーが生れる。

さて多くの言語はまた三つの人称を有している。これも一見した印象にかかわらず、決して自明のことではない。三人称の対話者は一人称からすれば四人称かも知れず、三人称の三人称は五人称であるかも知れない。人称が三つでなければならない何等の合理的な説明も、もともと存在しないのである。それにもかかわらず三つの人称をもつ言語が多いとすれば、それはやはり上述のような「三」の性質に由来するものとせねばなるまい。

デカルトがあらゆる実在者に対する懐疑から出発し、*cogito* によって *ego* の実在を証明したまさにその時から、哲学は新たな問題に直面することになったといわれる。他者の実在の証明である。メルロ・ポンティなどはこれを解決するために客体的世界の手前にある「生きられている世界」に立ちもどり、世界への身体的実存の共属性によって他者の現存の明証をもつと説く。これは自己の身体 ⇔ 対者の身体 ⇔ 第三者の身体という交換の構造をもつ。この解釈がもし誤っていないとすれば、これもやはり人称の性質、更には「三」の性質を基礎にしている

* Joshua Whatmough, *Language, A Modern Synthesis*, London 1956, p. 2.

とみてもよいであろう。そして対者（二人称）はここでも絶対的個と他者＝普遍とを媒介するものとして立ちあらわれることになる。ヘーゲルやマルクスの弁証法の考えもまず *an sich* なものがあり、これに *für sich* なものが対立し、その相剋によってこれが質の異なる *an und für sich* なものに転化すると教える。自己に向うものとしての対自はこれと質の異なる即且向自への媒介者として立つ。

「三」とはこのようなものである。それは単に個物の三個の集合に過ぎぬといったものではない。このように卑近な例からも明らかのように、言語の現象は我々のものの考え方に深く関わっており、精神の深みにその根を下しているということができよう。それだけでなく言語の現象は、我々に未だ形式化されていない暗い意識の淵を時として垣間見せてくれる。触知可能な形式のみをとらえてこれを分解し、その機能を考察することだけが、必ずしも「科学的」なことではなく、言語に接する道でもない、と思えてならないのである。

やまぐち いわお ロシア語

「教養部改善問題資料集」1976年5月1日。

教養部改善問題資料集

まえがき

我々が若かったときは、「教養部はどうなるのか」という漠然とした空気を感じていましたが、今は、「教養部はどうあるようにすべきか」という切実な立場に変わってきているのを身にしみて痛感します。分校という名で誕生した我々の組織体は、その時点から既に一種の差別的な扱いに甘んじなければならなかった、謂わば学制改革の鬼子だったのでしょうか。遠い将来の見透しを考える余裕など持ち得なかった当時としては、或いは止むを得なかったのかも知れませんが、到底それでは教育百年の計は立てられなかったであります。分校は教養部という